

	<p>いのち 猫の生命</p> <p>SCE・Net 持田典秋</p>	<p>E-53</p> <p>発行日 2013.9.6</p>
---	---	-------------------------------------

Dog year という言葉が使われている。それは、犬は人間の約 7 倍の速さで成長し老いていくことから、特に IT 業界などの、時代の移り変わりの速さを言っている。しかし、獣医師広報板 <http://www.vets.ne.jp/age/pc/> によれば、人間の 7 倍というのは大型犬の場合には大体当てはまるが、中・小型犬と猫は同等でおおよそ 4 倍に相当する。

猫は(中・小型犬も一緒だが)、小さな時はずいぶん早く育つ。生まれて半年で 9 歳相当となり、1 年経つと 17 歳、立派なティーンエイジャーである。1 年半で 20 歳、2 年で 23 歳、3 年で 28 歳となる。この時期を過ぎると後は毎年 4 歳ずつ歳を取っていく。

つまり、Cat Age は 3 歳以上の場合以下の式で表せる。

$$CA = 28 + 4(n - 3) \quad n \geq 3 \quad n : \text{年齢}$$

わが家のターニャも 13 歳半となるので、 $n = 13.5$ をこの式に当てはめると、何と $CA = 70$ 歳である。

確かに生まれて 2 年で家に来た当時は、1m くらいの高さの所には簡単に飛び乗り、階段は 2,3 段ごとに勢い良く駆け上がっていた。それが今は、高い場所はじっと眺めて飛び乗れるかどうかを判断し、やはりやめておこうとばかり諦める、あるいは階段も 1 段 1 段、時には両足を揃えて上がっていく。以前は、宅急便の配達ピンポンに反応し、玄関に真っ先に迎えに行っていたが、今やそれも聞き流すようになった。睡眠時間が長くなり、一日中寝ている。動きが緩慢になり、寝転んでばかりいる。見ているといささか身につまされることもある。しかし、食欲はあって体重も殆ど変わらず、元気で暮らしている。それでも、私が夜遅くなって帰って来る時は、今でも玄関でじっと待っていてくれる。

5 年ほど前に膀胱炎か尿道炎の疑いで治療に通い入院までしたが、その後は時々毛玉を吐く位で、加齢による変化以外は普通に暮らしている。

通常は、1~3 ヶ月に 1 回動物病院に連れて行き、爪切りと一緒に健康状態を診察してもらっている。爪を切るのを嫌がって、日頃はおしとやかなわが家の女王様も、この時ばかりは、はしたなくもギャーギャー騒ぎ、動物病院の待合室で待っているギャラリーをびっくりさせる。診察室からターニャを連れて出る私が、

恥ずかしくなる位である。これはやはり、幼児期に爪を切らせるように躑けて来なかったため、我が家に来た時は生まれて2年、つまり23 Cat Age だったから、躑けたくても時期的に困難だった。

今年の4月、動物病院で見てもらった時、触診で胸に大きなしこりができているのが見つかって、レントゲン検査を行った。その結果、右の乳腺に腫瘍らしきものができていることが判明した。医師の説明は「腫瘍でも良性の場合は問題ない。しかし、犬は50%の割合で良性だが、猫は80~90%が悪性である。つまり乳がんの危険性が極めて高い。対策としては手術だが、乳房は上3つが繋がっているの、1番上に見つかったことは、すでに3つに広がっていると見たほうが良い。また他への転移も考えられる。まず、半日の検査入院をし、生体のサンプル検査と血液検査など細胞レベルの検査を行う。その結果を見て対策を講じる。良性の場合は、何もしなくても良いが、悪性の場合転移も進んでいたら、あと半年の寿命かも知れない。手術をして助かる可能性も残されているが、転移もし易く、抗癌剤による痛みもある。」とのこと。一瞬目の前が真っ暗になったが、とにかく検査結果を待つしかない。帰ってインターネットで調べると、まさに医師の入った通りのことが出ていた。

10年以上一緒に暮らしたターニャのいない生活なんて、全く考えられない。しかし、何時かはこうなることははっきりしていた。どのように対応するか、結果が出るまで1週間の猶予期間が与えられたので、その間妻とこの問題について真剣に悩みながら話し合った。

猫の生命の事と言っても、私達とて同じこと。二人共日頃から、植物人間状態で生き続けたくない、助かる可能性のない手術はやめる、胃瘻などもってのほかと、いわば自然のままの死を望んでいたの、ターニャに関しても同じ結論に達した。つまり、結果が乳癌であっても手術はしないと覚悟した。手術をしても6ヶ月の生命、癌は直ぐに転移などしやすいし、抗癌剤の副作用で苦しむのも見ていられない。それならば、手術はせずに今まで通り世話をしてやろう。苦しんだら、痛み止めを与えてやろう。それがターニャの寿命であり、自然である。私達は一縷の望みを持ちつつも、どんな結果であろうと、それを受け入れようと覚悟を決めた。

1週間が過ぎ、動物病院に緊張しながら結果を聞きに行った。医師から「生体検査の結果はマイナス。がん細胞は全く検出されなかった。私にとって、このようなことは今までになかったレアケースである。血液検査の結果も異常無しなので問題ないと思うが、念のため来月中旬辺りに再検査を行ったらどうか。」との申し入れに私達も同意した。覚悟を決めて乗り込んだ割には、いささか拍子抜けの感は否めなかった。良性の腫瘍は10%と言うから、まさに九死に一生を得たわけ

で、ターニャは非常に幸運であった。家に帰ると私達の心がわかるのか、ターニャは元気に動き回って側に寄って来た。食欲も旺盛。

それからおよそ1ヶ月、乳がん疑惑の再検査に行った。体重は3.7kg、通常4kg程などでかなり減っている。ターニャにもストレスがあったのだろうか。医師は、今度は念を入れて腫瘍の右側から4箇所、左側から2箇所をサンプリングした。腫瘍の形は先月より小さくなっている感じで、他には転移してはいないとのことだった。サンプル数から言って、今回の麻酔は前より強かったのか、ターニャは家に帰ってからもウニャウニャ、ニャーニャー騒ぎ、なかなか静かに寝付かなかった。水と食べ物はチーズペーストのみ。

それから1週間待った。今度は電話で連絡があった。結果は、サンプルから癌細胞は全く見当たらなかった、やはり単なる脂肪の塊であったのだろう、とのこと。この時も、非常に珍しいケースだと繰り返し言われた。

乳癌の疑いは晴れた。確かに運が良かったのかも知れない。だが、ターニャも人間で言えば70歳である。何があってもおかしくない時期に差し掛かっていることも事実である。もし悪性の腫瘍だったらと思うと、やはりゾッとする。

あれから6ヶ月、ターニャの現実は何事も起こらず、今日も甘えてブラッシングして欲しくて私のところに来てせがむ。元気である。まだまだターニャとの生活は続く。

この事件は、ターニャを通し生命について私達に色々なことを考えさせてくれた。